梅花女子大学食文化学部紀要
第３号（2015年３月20日刊）抜刷

シェイクスピア時代のスパイス

上　村　幸　弘

シェイクスピア時代のスパイス

上　村　幸　弘

UEMURA Yukihiro：Spices in the Age of Shakespeare

はじめに

イングランド銀行（Bank of England）の西側に位置し、東西はPrince's StreetとOld Jewryに、南北はPoultryとGresham Streetに囲まれた一角にThe Worshipful Company of Grocersはある[(1)]。通称The Grocers' Hallと呼ばれるこの建物は、ロンドンの社交界に優雅で伝統的な場を提供すると同時に、慈善事業として多くの学校に奨学金を給付している。もちろんこれは、形骸化した現在の姿であって、本来のThe Grocers' Companyは、文字通り、食料雑貨商組合である。その起源は12世紀にまでさかのぼると言われているが、はっきりとした記録としては14世紀に22人の胡椒商によって結成された同業者組合（fraternity）が始まりである。1617年に薬業組合（the apothecaries）が独立するまでは、食料雑貨商組合は薬剤も取り扱っていた。その後、薬業組合は1673年にThe Chelsea Physic Gardenという独自のハーブガーデンを持ち、世界各国の植物の収集・栽培を行い、今日に至っている。ここで扱うのは、薬業組合が独立する以前の17世紀前半の食料雑貨商組合である。スパイスの歴史的な流通経路を探りながら、シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）時代の香辛料・香料の用途について考えみたい。

1　処方箋調剤としてのスパイス

ルネサンス期のイングランドで、シェイクスピアと同時期に活躍した文人にトマス・ロッジ（Thomas Lodge, 1558-1625）という作家がいる。彼の書いた牧歌的な散文ロマンス『ロザリンド』（*Rosalynde*）は、シェイクスピアの中期の代表的な喜劇『お気に召すまま』（*As You Like It*）の材源となったことで知られているが、1603年に『ペスト論』（*Treaties of the Plague*）というパンフレットを出版している。『ペスト論』に入る前に、ロッジの経歴を少し見ておく。

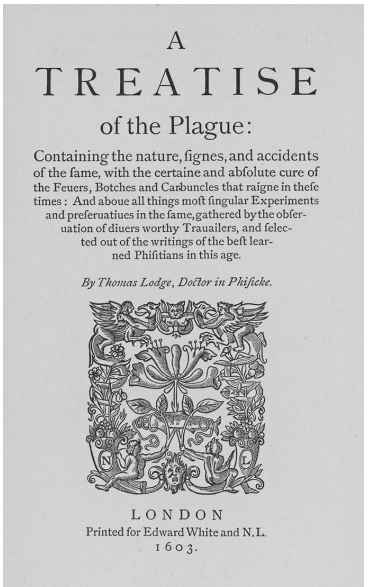
A
TREATISE
of the Plague:
Containing the nature, ſignes, and accidents of the ſame, with the certaine and abſolute cure of the Feuers, Botches and Carbuncles that raigne in theſe times: And aboue all things moſt ſingular Experiments and preſeruatiues in the ſame, gathered by the obſeruation of diuers worthy Trauailers, and ſelected out of the writings of the beſt learned Phiſitians in this age.
By Thomas Lodge, Doctor in Phiſicke.
LONDON
Printed for Edward White and N.L.
1603.

図１　ロッジ『ペスト論』のタイトルページ（1603）

ロッジは同名の父親Sir Thomas Lodgeの次男で、ロンドン生まれ。オクスフォード大学トリニティーカレッジを出た後、リンカーン法曹院で法学を修め、後にフランスに渡ってアヴィニョン大学で医学を学んでいる。多才というか、当時のUniversity Witsと呼ばれる大学才人の中でも、この経歴は抜きん出ていると言ってよいだろう。父親のSir Thomasは食料雑貨商組合の代表を務め、1560年にロンドンの行政長官職にあたるシェリフに任命され、62年には

ロンドン市長にまで登りつめる。いずれの職も同業組合員すなわちギルドの代表者で構成される参事会員の中から選ばれる名誉職であるとはいえ、商都ロンドンの市壁内では強大な権限を持ち、宮廷との繋がりも強かった。

さて、『ペスト論』はこうした環境の中で出てきた必然の書と言えるかもしれない。はじめに述べたとおり、ロッジの父親も代表を務めた食料雑貨商組合はスパイスおよび薬剤を扱うことを生業としていたので、医師の資格を持つロッジにとっては高価な薬剤が比較的入手しやすい環境にあったのではないかと思われる。もちろん、『ペスト論』が出てきた背景には、イングランドにおけるペストの流行がある(2)。特に1603年はロンドン市内でもペストが猛威を振るい、週間死亡者数が数百人に上ることもあった。埋葬しきれない死者の放つ屍臭。有効な治療法もなく、市民の多くは郊外へと逃れ、医師も不足した。このような状況下で『ペスト論』は書かれた。ロッジはこの中でペストの予防薬や治療薬の処方箋を紹介しているが、そこで用いられる薬剤の多くがハーブである。一方、肉桂（cinnamon）、丁子（clove）、肉豆蔻（nutmeg）などのスパイスも頻繁に調合される。

> 厳選された没薬（myrrh）、沈香（wood of Aloes）、赤褐色粘土（Terra Sigillata）、調合済みアルメニア産赤色顔料（Bole of Armenia）、メース（mace）、丁子（clove）、サフラン（saffron）各1オンスをパウダー状にする。その1ドラム（1/16オンス）をローズウォーターに溶かして服用。夏季にはレモン果汁、冬季にはワインに入れてもよい。（Lodge 34）

サフラン以外はイングランドで生産できない。そのほかの調剤は輸入品である。このうち、メースと丁子は胡椒や肉桂とともに取扱量の比較的多い商品であった（メースは肉豆蔻の皮で作る香辛料）。ロッジが紹介するこの処方箋は、1564年フランス全土でペストが流行した際、予防薬および治療薬としてスペイン国王フェリペからフランス国王シャルル9世に贈られたものだとされる。

14世紀半ばより、ヨーロッパ各地でペストが大流行し、その後も断続的に流行が続くのだが、その病因は19世紀末になるまで解明されることはなかった。中世からルネサンス期を通じて医療の現場が依存していた薬剤が、古代より薬効の伝えられるハーブやスパイスであった。ハーブについては先にも述べたとおり、ロンドンの薬業組合がハーブガーデンを開設するなど研究は進んでおり、実際、それ以前からハーバリストと呼ばれる本草研究者たちによる専門のハーブ園はロンドンにも存在していた。ジョン・ジェラード（John Gerard）もその1人で、彼の『本草書』（*The Herbal or General History of Plants*）は1597年に初版が出版され、1633年に調剤師トマス・ジョンソン（Thomas Jonson）により増補され

図2　ジェラード『本草書』のタイトルページ（1633）

て今日に至るまで読み継がれている名著である。ヘンリー8世（在位1509-1547）の時代には海外からハーブの種が輸入され、気候に馴染んだものはイングランドにも定着した。食用あるいは薬用としてのハーブは各家庭の菜園でも栽培され、民間療法として利用されてきた[(3)]。しかし、スパイスはそのほとんどが自国生産できず、輸入に頼らざるを得なかった。ヨーロッパがアジアのスパイスを入手するのは紀元前からの記録が残っており、ローマ帝国時代も様々なルートで輸入された。これほど古くから利用されているにもかかわらず、ヨーロッパの人々にとってスパイスは、未知の国から船に乗って、あるいはラクダに乗ってやって来る舶来品なのである。イギリス・ルネサンス期の文学において、いまだにスパイスが異国情緒と結びつくのはそのためである。

そのスパイスを受けるロンドン側の窓口、それが食料雑貨商組合であった。それではこのThe Grocers' Companyまでの道のりをシェイクスピアとともに少しずつ辿ってみよう。

2　地中海貿易から大航海時代へ

古代ローマのネロ皇帝（在位54-68）統治下で活動したディオスコリデス（Pedanius Dioscorides, c.40-90）の『植物誌』（*De Materia Medica*）にも胡椒への言及がある。ヴァスコ・ダ・ガマ（Vasco da Gama, 1460-1524）以前、インドからローマへの香辛料の経路は、いずれアラビア半島周辺を通過することになる。アラビア海から紅海に奥深く入り、エジプト側から運河を抜けて（Czarra 31）、ナイル川を下って地中海に至る。ここまでがアラブの商人の仕事である。なお、集散地のアレクサンドリアでは香辛料に関税がかけられていたことも知られている（Czarra 30）。そこからはヨーロッパの商人たちによって海路ローマへと荷は受け継がれる。また、陸路でベイルートやアレッポに向かい、そこでヨーロッパ人が香辛料を買い付けるという手段もあったという（ユイグ 17）。

中世になると地中海貿易はますます盛んになり、ヴェニスやジェノヴァの商人、それにユダヤの商人が海運業を営んだ。シェイクスピアの『ヴェニスの商人』（*The Merchant of Venice*）では商人アントーニオの貿易船に香辛料が積まれていることが示唆されている。

Should I go to church
And see the holy edifice of stone,
And not bethink me straight of dangerous rocks,
Which touching but my gentle vessel's side,
Would scatter all her spices on the stream,
Enrobe the roaring waters with my silks,
And, in a word, but even now worth this,
And now worth nothing?（1.1.29-36）

教会へ出向いて
石造りの大聖堂を拝むだけで、
危険な岩礁を直ちに思ってしまう。
ほんの僅か、軟な船べりを掠っただけで、

香辛料が潮流に撒き散らされ、
逆巻く浪に絹のドレスを纏わせる羽目になる。
要は、たった今まで大そうな価値があったものが
次の瞬間には海の藻屑と消えてしまうってわけだ。

ここでは、海洋貿易のリスクについて語られているが、さらに「船といってもただの板、船乗りもただの人間だ。それに陸のネズミに海のネズミ、陸の盗賊に海の盗賊が出るかもしれない。つまり海賊だ」（1.3 22-24）と、当時の海路・陸路で商品が強奪される危険をユダヤの金融業者シャイロックは指摘する。

同時期に活躍した劇作家クリストファー・マーロウ（Christopher Marlowe, 1564-93）の描く『マルタ島のユダヤ人』（*The Jew of Malta*）ではユダヤの商人バラバスが次のように豪語する。

Mine argosy from Alexandria,
Loaden with spice and silks, now under sail,
Are smoothly gliding down by Candy shore
To Malta, through our Mediterranean sea.（1.1.44-47）

アレクサンドリアを出港した我が船団は、
スパイスと絹を積んで、現在航行中、
クレタの海岸線に沿って滑り込み
マルタ島に向かって、地中海を駆け抜ける。

バラバスはスパイスや絹以外にも、「オパール、サファイア、アメジスト、ジルコン、トパーズ、エメラルド、ルビー、ダイヤモンド」（1.1.25-27）等の宝石類を商っている。しかし、15世紀になり東ローマ帝国がオスマンに滅ぼされると（1453年）、地中海貿易はオスマン帝国の支配下に置かれ、香辛料には高い関税がかけられた。『マルタ島のユダヤ人』でも、オスマン帝国に朝貢するためにバラバスの財産が没収される場面がある。このイスラム国家の隆盛により、ヨーロッパ - インド間の地中海ルートは閉ざされることになる。

ポルトガルによるヴァスコ・ダ・ガマの喜望峰ルート（1497年）は、こうして閉ざされた地中海ルートに代わる新たな、そして種々の仲買人を介さないで直接インドと海路だけで貿易ができるルートとなったのである（Shaffer 40）。ただし、これまでインド貿易の主翼を担ってきたアラブの商人との衝突は避けられず、インド側での拠点づくりも大きな問題だった。インド西部ディウ島沖の海戦でついにポルトガル船隊はアラブ海軍を打ち破る。1535年、ディウ島に要塞を建設したポルトガルはアラビア海の制海権を獲得するに至る。結果、香辛料の値段は大幅に下がり、16世紀のヨーロッパ人にとって香辛料はやや身近なものとなった。当時取引された香辛料とは、胡椒（pepper）、肉荳蔻（nutmeg）、肉桂（cinnamon）、丁子（clove）である。特に胡椒の取引量は他を圧倒した（Shaffer 27）。

オスマン帝国に地中海の制海権を奪われた段階で、ヴェニスの商人やジェノヴァの商人の役割は実質的に終わっている[(4)]。ジブラルタル海峡は封鎖されたに等しく、地中海海域の海洋国

家はアジアおよびアメリカ大陸への航路の開拓に遅れをとり、ポルトガル、スペイン、オランダ、イングランド等の西ヨーロッパ諸国の後塵を拝することとなる。したがって、シェイクスピアが描く『ヴェニスの商人』は異国情緒あふれるノスタルジアなどではなく、新規航路の開拓と現地拠点づくりを急ぐイングランド王朝の海洋国家としての幕開けを映しているとも読める。シェイクスピア作品に海事用語が正確に多用されていることは、しばしば指摘されることであるが（Laughton 141）、劇作家自身の興味の在り処というよりも、冒険・探検に関する情報の質と量が飛躍的に高まったことが遠因としてある。

イスラム国家の台頭と西ヨーロッパ諸国の大航海時代の始まりはほぼ同時である。これが全くの偶然でるか否かは別として、ルネサンス期のヨーロッパ人にとって、オスマン帝国は文字通り避けて通るべき存在であった。結果、西ヨーロッパ各国間での熾烈な制海権争いが始まり、遠洋で商船同士が衝突する。

3　武装商船

『ヴェニスの商人』に登場するアントーニオは海運業を営み、対外貿易に投資してはいるが、実際に自分の船に乗って現地の人間と価格や取引条件を交渉するわけではない。その点で、前述のSir Thomas Lodgeに似ている。Sir Thomasは1562年にロンドン市長に選ばれたというところで話が終わっていたが、後日談がある。彼の個人としての仕事は、対外貿易であった。特にアントワープでの投資を専門としていた。アントワープは16世紀の初頭からオランダやイングランドの商館が建ち並ぶ国際貿易都市で、オランダの商船が持ち帰った胡椒の集散地として賑わったほか、イングランドの毛織物輸出の大陸側の拠点として栄えた。1563年、Sir Thomasはアントワープでの投資に失敗し、莫大な借金を抱えて返済できずにフリート監獄（ロンドンにあった債務者専用の監獄。1845年廃止）に投獄されている（Sisson 18）。『ヴェニスの商人』はもちろん虚構ではあるが、対外貿易の失敗という点では状況は似ている。ただし、塩野七生は『海の都の物語』の中で、アントーニオが「一隻の船全部を所有」していることの非現実性を指摘し、さらにその船に「自分の商品だけを満載して航海に出す」こともあり得ないとする（158）。リスク回避のためだ。

一方、シェイクスピアは『ヴェニスの商人』の数年後に『十二夜』（*Twelfth Night*）という喜劇を書くが、この作品も海にまつわる場面が多い。主人公の少女ヴァイオラを乗せた船が海難事故に遭遇し、双生児の兄セバスチャンと離れ離れに海岸に打ち上げられる。セバスチャンを救った男は、かつてある船の船長をしていたアントーニオという人物で、打ち上げられたこの国の軍隊と一戦交えた経験がある。この国の人間を多数殺したのかと聞くセバスチャンの問いに対し、アントーニオは次のように答えている。

> The offence is not of such a bloody nature,
> Albeit the quality of the time and quarrel
> Might well have given us bloody argument.
> It might have since been answered in repaying
> What we took from them, which for traffics sake
> Most of our city did. Only myself stood out,

For which if I be lapsed in this place
I shall pay dear.（3.3.30-37）

自分の罪はそんなに血生臭いものではありません。
ただし、時と場合によっては
そのように発展した可能性はありましたが。
彼らから略奪した品々を返せば
決着はついたはずですし、実際、貿易再開のため
周辺地域では返還しました。しかし私だけが反対し
したがいまして、この地で捕まれば、
高くついてしまうのです。

これだけでは決定的なことは何も言えないが、少なくともアントーニオの周辺地域は貿易を生業としており、おそらく、アントーニオの船にも商品が積んであったはずである。当事国と「貿易再開のため」とあるからだ。したがって、オーシーノーの船から略奪したものもまた商品であったと思われる。またここから推察されるのは、おそらく同じ海域を航行していた周辺国の船と一緒にオーシーノーの船を襲っていること。シャイロックの言う「海のネズミ」というわけだ。さて、このネズミの正体はなんだろうか。もちろん、海賊を本業にしている輩とも考えられるが、アントーニオの徹底的な否定から、もう少し事情を汲みたい。

Antonio never yet was thief or pirate,
Though I confess, on base and ground enough,
Orsino's enemy.（5.1.74-76）

これまで盗賊や海賊をしたことはありませんが
十分な理由があって、オーシーノーの敵であることは
お認めいたしますが。

オーシーノーの積み荷を略奪した行為は認めるものの、盗賊でも海賊でもないという。正当な略奪行為というつもりなのか。「十分な理由」とは何を指すのか。ここからは推測である。この事案は商船同士の衝突であったのではないか。そして、彼らはあらかじめ武装していたのではないかということである。地中海貿易ならびに、その後のアジア航路や新大陸航路における商船は、拮抗する軍事力のバランスで保たれていたと言われている（清水 15）。そう言えば、『ヴェニスの商人』の材源ともなった『イル・ペコローネ』（*Il Pecorone*）ではこのような描写があったのを思い出す。

So Ansaldo at once provided a fine ship, and had it laden with much merchandise, and equipped with banners and the necessary arms.（Bullough 465）

アレクサンドリアに向けて旅立つ息子のために、父親が立派な船を準備してやるのだが、その際に、商品とともに軍旗（banners）と必要な武器（arms）を装備するのだ。『イル・ペコローネ』は14世紀後半のイタリアの説話集で1558年の出版。物語の成立年代としては、オスマン帝国進出前の地中海イタリア商人全盛期を描いていると考えられる。これがシェイクスピアに伝わることになるのだが、ヴェニスのアントーニオの所有する商船は大型帆船である。

Your mind is tossing on the ocean,
There where your argosies with portly sail
Like signiors and rich burghers on the flood,
Or as it were the pageants of the sea,
Do overpeer the petty traffickers.（1.1.8-12）

気持ちは大海原で揺れている
君の大型商船は堂々と帆を張り
行き交う小型の船を眼下に捉え
波間を渡る貴族か豪商然として
果ては海上の山車といったところか

この大型帆船が、当時商船として使われていたカラック（carracks）という指摘もある（Laughton 153）。それを軍事用に改良したものがガリオン（galleon）で、スペイン無敵艦隊との戦闘に用いられた軍艦である（杉浦 242-44）。つまり、商船から軍艦への転用は可能なのであって、これが船団（argosies）を組んでいるのだ。

図３　ヴィッセルによるロンドン景観図（1616）

大型帆船さえも入港可能なテムズ川のドックに溜まる各国商船をロンドン市民は毎日のように見ていたに違いない。テムズ川南岸から見たClaes Van Visscher（1586-1652）によるロンドン景観図（図3）にも行き交う大型帆船、それにサザーク（南岸）とシティー（北岸）を渡す小さな艀が克明に描かれている。シェイクスピアの海洋商船のイメージは案外この辺りから広

がりを見せたのかもしれない。

4　おわりに

アレクサンドリアでスパイスを受け取ったヴェニスの商人が荷を回すのは地中海の内海の範囲か、せいぜいジブラルタル海峡を抜けてロンドンやアントワープまでと言ったところである。他方、地中海ルートが閉ざされて以降、西ヨーロッパ諸国の商船は、アフリカ大陸を喜望峰まで南下、マダガスカルを東に見ながらモザンビーク海峡を抜けてマリンディやモンバサをめざす。そこが中継地点となってアラビア海を東進横断、インド西岸に到達した(5)。

The fairy land buys not the child of me.
His mother was a vot'ress of my order,
And in the spiced Indian air, by night,
Full often has she gossip'd by my side,
And sat with me on Neptunes's yellow sand.（2.1.122-26）

妖精の国をくれてもその子は渡しません。
この子の母親は私の宗団の信者、
スパイス香るインドの風に吹かれて、夜な夜な
私のそばに来ては無駄話に花を咲かせ、
大海原の黄色い浜辺に腰をおろしたものでした。

『夏の夜の夢』（*A Midsummer Night's Dream*）で妖精の女王タイターニアが語るインドの風景である。シェイクスピアは「海神ネプチューンの黄色の砂浜」（逐語訳）と書きながら、インド西部のムンバイ、ゴア、カリカットあたりの胡椒の集散地を思い浮かべるか、原産地である南西部マラバール海岸付近の風の匂いを想像していたのだろう。しかし、その情報は地中海ルートで伝わったものであろうか、それともアフリカ周りで伝わったのだろうか。『夏の夜の夢』は1595年頃の作とされ、東インド会社が出資者を募って行う単発の交易事業の第一次航海が1601年のことだから（浜渦 25）、直接現地の情報が本国に届くのはまだまだ先の話である。むしろ、アジアとの交易にすでに100年の実績を持つポルトガルなど海洋先進国の貿易商人が、アントワープやロンドンに荷を下ろす際にもたらされる情報こそ、シェイクスピアの情報源ではなかったか。14世紀半ば、22人の胡椒商が同業者組合を立ち上げ、The Grocers' Company of London（ロンドン食料雑貨商組合）の礎を築いた。これらロンドンの商人たちは1526年ロンドン市壁の中央部Old Jewryと呼ばれる旧ユダヤ人街に最初の同業組合会館（Hall）を構える。ポルトガルのアジア交易が軌道に乗り始めた時期と一致する。ここにインドや東南アジアのスパイスとともに異国情緒あふれる武勇伝が集まったに違いない。「スパイス香るインドの風に吹かれて、夜な夜な、私のそばに来ては無駄話に花を咲かせ、」ロンドンでの胡椒価格維持の交渉でもしていたのだろうか(6)。

注

本稿のShakespeare作品からの原文の引用はすべて*The Riverside Shakespeare* 2nd Edition（Houghton Mifflin, 1997）による。

（1）The Worshipful Company of Grocersに関しては、同カンパニーのホームページを参照。http://www.grocershall.co.uk/（2014年10月31日）

（2）ペスト流行期のハーブについては、拙論「シェイクスピア時代のペスト対策」（『文学と評論』第3集第10号、2014年11月）で詳述した。

（3）たとえば、「頭痛にはアニスの実（aniseed）、カッコウチョロギ（betony）、カラミント（calamint）、コゴメグサ（eyebright）、ラヴェンダー（lavender）、ゲッケイジュ（bay）、バラ（roses）、ヘンルーダ（rue）、セージ（sage）、マヨラナ（marjoram）、カントウ（foal's foot）などの調合剤が効くとされていた。」（Burton 180）

（4）ただし、地中海商人の巻き返しがあり、「1520年ごろから、北西ヨーロッパ向けの香辛料貿易は、その後の約半世紀の間、イタリア商人とポルトガル商人との間で二分されていたと言われている。」（清水 12）

（5）インド航路を開拓したヴァスコ・ダ・ガマは、マリンディでグジャラート（インド）出身のイスラム教徒を案内人として乗船させている（Shaffer 37）。

（6）食料雑貨商組合の表向きの存在理由は、品質管理に尽きるのだが、本質的には営業権の独占と価格維持であった。エリザベス1世女王即位2年後の1560年、スパイスの流通価格の記録が残る。それぞれ1ポンド当たりの価格である。メース14シリング、丁子（クローブ）11シリング、肉桂（シナモン）10シリング6ペンス、生姜（ジンジャー）約3シリング8ペンス（Burton 111）。そこからやや時代は下るが、1589年当時、砂糖20シリング、胡椒6シリング、食塩6ペンス（3ブッシェルあたり）であった（Macquid 136）。質量：1ポンド≒453グラム、1ブッシェル≒36リットル。通貨：1シリング＝1/20ポンド＝12ペンス。

引用文献

Bullough, Geoffrey. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. I. London: Routledge and Kegan Paul Ltd., 1957.

Burton, Elizabeth. *The Elizabethans at Home*. London: Secker & Warburg, 1958.

Czarra, Fred. Spices: *A Global History*. London: Reaktioj Books Ltd., 2009.

Gerard, John. *The Herbal*. London: Adam Islip, Joice Norton and Richard Whitetaker, 1597. Revised, 1636. New York: Dover Publications, Inc., 1975.

Laughton, L. G. Garr. "The Navy: Ships and Sailors." *Shakespeare's England*. Vol. I. Oxford: The Clarendon Press, 1916. Reprinted, 1970.

Lodge, Thomas. *A Treatise of the Plague*. 1603. *The Complete Works of Thomas Lodge*. New York: Russell & Russell, 1883. Reissued, 1963.

Macquoid, Percy. "The Home." *Shakespeare's England*. Vol. II. Oxford: The Clarendon Press, 1916. Reprinted, 1970.

Marlowe, Christopher. *The Jew of Malta*. 1592. Ed. T. W. Craik. London: Ernest Benn Ltd., 1966.

Shaffer, Marjorie. *Pepper*. New York: St. Martin's Press, 2013.
Sisson, Charles J. *Thomas Lodge and Other Elizabethans*. New York: Octagon Books, Inc, 1933.
塩野七生　『海の都の物語』　中央公論社　1980年
清水廣一郎　『中世イタリアの都市と商人』　洋泉社　1989年
杉浦昭典　『海賊キャプテン・ドレーク』　講談社学術文庫　2010年
浜渦哲雄　『イギリス東インド会社』　中央公論新社　2009年
ユイグ、E＆F-B　『スパイスが変えた世界史』藤野邦夫訳　新評論　1998年

参考文献

Constable, Olivia Remie. *Trade and Trader in Muslim Spain*. Cambridge: CUP, 1994.
Lopez, Robert S. and Irving W. Raymond. *Medieval Trade in the Mediterranean World*. New York: Columbia UP, 1955.
Nicol, Donald M. *Byzantium and Venice*. Cambridge: CUP, 1988.
Wilson, F. P. *The Plague in Shakespeare's London*. Oxford: OUP, 1927.
熊井明子　『シェイクスピアの香り』　東京書籍　1993年
熊井明子　『シェイクスピアのハーブ』　誠文堂新光社　1996年
坂巻清　『イギリス・ギルド崩壊史の研究』　有斐閣　1987年
鈴木薫　『オスマン帝国』　講談社現代新書　1992年
高橋康成他編　『シェイクスピア辞典』　研究社出版　2000年
デュフルク、シャルル・エマニュエル　『イスラム統治下のヨーロッパ』　芝修身他訳 藤原書店　1997年
ドルビー、アンドリュー　『スパイスの人類史』樋口幸子訳　原書房　2004年